

富山市上新保遺跡試掘調査報告

——富山市上新保土地区画整理事業に先立つ試掘調査——

1996年3月

富山市教育委員会

富山市上新保遺跡試掘調査報告

——富山市上新保土地区画整理事業に先立つ試掘調査——

1996年3月

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市上新保地内に所在する上新保遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 試掘調査は、仮称上新保土地区画整理組合の施工する上新保土地区画整理事業に係わるもので、同組合設立準備委員会の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。
調査にあたっては、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けた。
- 3 調査期間
　現地調査 平成7年11月4日～平成8年1月8日
　遺物整理 平成8年1月9日～平成8年3月29日
- 4 調査担当者 富山市教育委員会 学芸員 古川知明
- 5 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
- 6 遺構記号は、溝：SD、穴：SK、ピット：P、竪穴状遺構：SX である。
- 7 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 本書の執筆は、古川が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯	3
III	調査の概要	4
IV	小結	14
	写真図版	19
	報告書抄録	34

図版目次

図版1	上新保遺跡周辺の航空写真	調査風景（第2地区北西部）	
図版2	第1地区 14トレンチ	1トレンチ 16トレンチ	
図版3	第2地区 28トレンチ	29トレンチ	
図版4	第2地区 29トレンチ	30トレンチ 31トレンチ	
図版5	第2地区 34トレンチ	37トレンチ	
図版6	第2地区 38トレンチ		
図版7	第2地区 50トレンチ	51トレンチ	
図版8	第1地区遺物	土師器・須恵器・土師質土器	珠洲焼
図版9	第1地区遺物	珠洲焼	青磁・鉄器・砥石
図版10	第1地区遺物	八尾焼・美濃瀬戸	羽口 種子
図版11	第1地区遺物	鉄津	
図版12	第2地区遺物	土師器	
図版13	第2地区遺物	土師器	須恵器
図版14	第2地区遺物	須恵器	土師質土器
図版15	第2地区遺物	鉄器・砥石・越中瀬戸焼・唐津・伊万里	

挿図目次

第1図	上新保遺跡と周辺の遺跡
第2図	上新保遺跡周辺の地形と河川
第3図	試掘調査区域
第4図	調査区と確認された遺跡の広がり
第5図	第1地区的遺構の広がり
第6図	第2地区的遺構の広がり
第7図	第2地区的土層・遺構
第8図	第2地区出土遺物
第9図	第2地区出土遺物
第10図	出土遺物（第2・1地区）
第11図	第1地区出土遺物

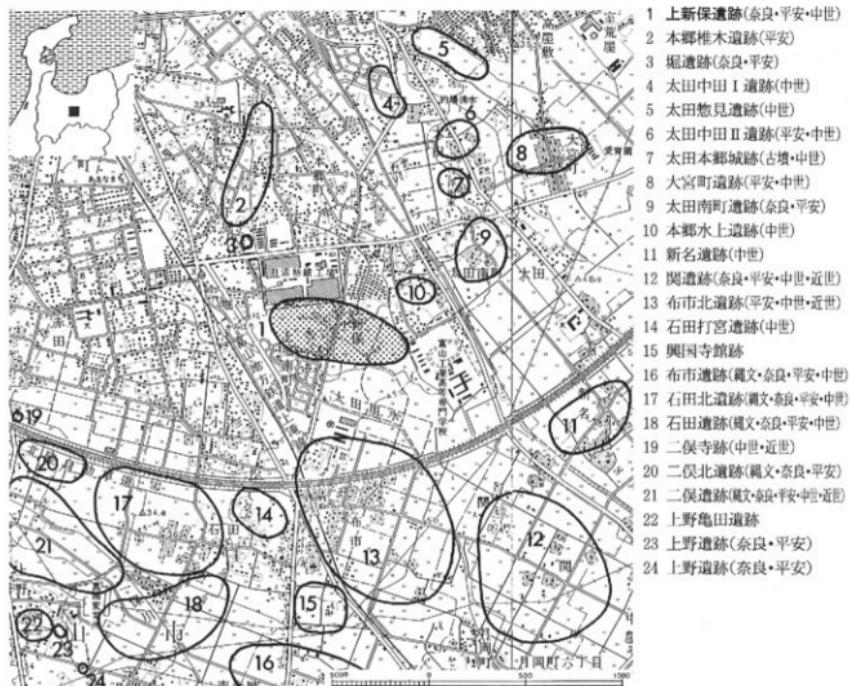
I 遺跡の位置と環境

上新保遺跡は、富山市街地の南方約5kmの富山市上新保地区に所在する遺跡である。遺跡北部は日清紡績工場敷地内に広がっている。遺跡の南約800mには北陸自動車道が東西に走っている。

遺跡は、東を流れる常願寺川と西を流れる神通川支流熊野川とによって挟まれた扇状地扇部中央に立地し、常願寺川上流から神通川下流へ流れる黒川の左岸部に立地する。遺跡から常願寺川へは約4km、熊野川へは約3kmを隔てている。標高は36~38mを測り、東から西へ向って緩やかに傾斜している。

市街地開発の少ない明治43年段階の地形図（陸地測量部作成2万分の1迅速図）を基に地形復原を行ってみると（第2図）、上新保遺跡周辺は南東の常願寺川から北西方向へ向って広がる扇状地上に立地しており、常願寺川流域の影響を強く受けたと考えられる。位置はむしろ熊野川及びその支流の土川に近接するが、等高線への影響は少ない。この扇状地では、標高25~37mの位置に自噴井と呼ばれる湧水地点がいくつも存在する。よく知られているものとしては、的場の清水（太田北地内）、本郷の湯（本郷町地内）、経力の湯（経力地内）のほか、刀尾神社（太田南町地内）境内の功德水、重要文化財浮田家住宅（太田南町地内）前の清水があり、これらは扇端部地形特有の湧水とみることができる。また月岡地区の独立丘陵地ノ山東麓にある月見が池も湧水地であり、かつては湖水のように広がっていたという伝承も残されている。

この扇状地を南東から北西方向へ流れる多くの小河川は、扇端部付近で2~3mの深い谷状地形を作り出して



第1図 上新保遺跡(1)と周辺の遺跡 (1:25,000)

おり、河川間の平坦地はさながら河岸段丘の様相を呈する。

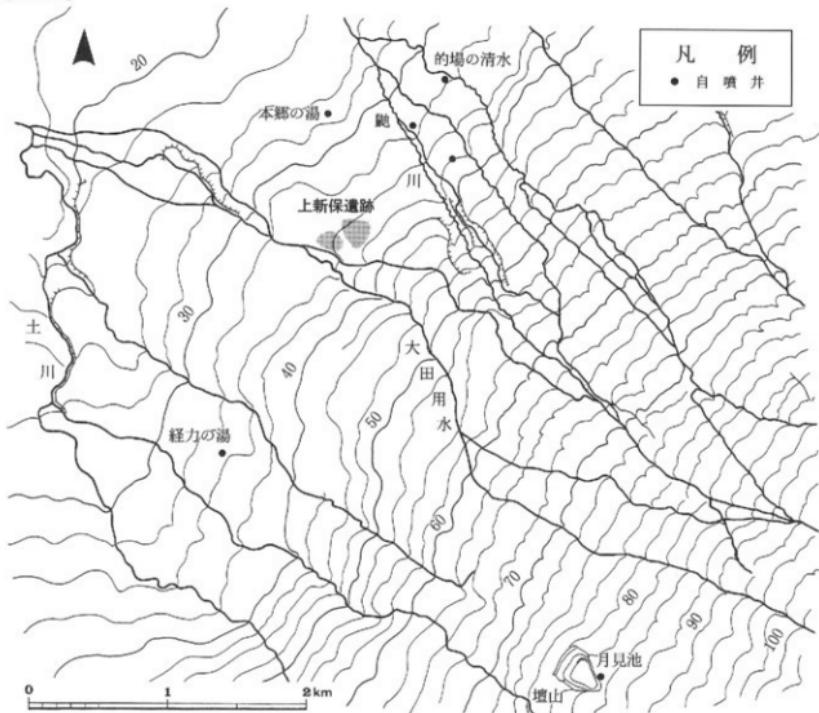
上新保遺跡は、このような扇端部にあって、扇尖部傾斜地から平坦地に移り変る傾斜変換点付近に立地し、安定した平坦面上に形成されている。遺跡のすぐ南側は、太田用水に合流する小河川がかつて流れおり、その名残は一段低くなった水田に認めることができる。この小河川はかなり幅があり、また流れも緩やかであったという。このように遺跡の周囲では湧水や河川から容易に水が得られる地であったことがわかる。

上新保地区西側は都市計画法に定める市街化区域となっているため、ここ数年で急激に区画整理や宅地開発が進み、旧地形が次第に失われつつある。今はこの地区も市街化区域に組み入れられたが、現在はまだ水田耕作の利用が多く、大規模な農業基盤整備も行われなかつたため、旧地形が比較的良く残されている。

遺跡の周囲は水利の便が良かったためか、氾濫原にもかかわらず縄文時代からの遺跡形成が認められる。それらは熊野川右岸支流の土川の右岸側に集中し、縄文後期から晩期に営まれていることが特色としてあげられる。二俣北遺跡のみは縄文中期に始まるもので、周辺域で最も古い集落の一つと推定される。

弥生時代から古墳時代は空白域となる。北方の大泉地区で1遺跡が確認されるのみである。

奈良～平安時代にかけては急速に遺跡数が増加する。このような傾向は、神通川扇状地や呉羽丘陵地域の古代集落の消長と共通する。この地域においては土川右岸部に遺跡が集中し、また扇端部にも小規模な遺跡がまばらに認められる。調査を行ったものは上新保遺跡のみであるが、開発型の集落が集中的に営まれたものと推定される。



第2図 上新保遺跡周辺の地形と河川（国土地理院 明治43年陸地測量部作成迅速図を利用）

中世においては、富山市南部に広域に広がる太田保に含まれていたとみられる。周辺では13~14世纪代に形成されたと推定される集落遺跡が多く営まれ、さかんに開発が行われたようすが伺える。

中世に遡る古い飛騨街道は、飛州往来あるいは飛州街道とよばれ、富山から小泉、布市、小黒、坂本をへて笛津へ抜けるルートをとった。布市から笛津までは布市道・布市往来と呼ばれた。小泉からは、大町、下堀、上堀、布市となる。上新保はこのルートのうち上堀の真東にあり、この街道からわずかに東へ入った地点にある。交通上利便な地に位置している。

布市は、康永3年(1344)越中守護となった桃井直常ゆかりの地で、曹洞宗太平山興国寺は興国6年(1345)直常開基と伝える。ここにはかつて中世社寺七宮七寺が集結していたと伝えられ、現在は興国寺のほか、常福寺のみが残るものであるが、密教系寺院が多く築かれたことは戦国武将の強いつながりを背景としていることが想起される。直常は観応の擾乱で足利方に破れ最後にこの地で余生を暮らしたという伝承が残されており、上新保の桃井家はその末裔という。

上新保の名称は、明治19年(1886)以前に改称されたもので、江戸期の文献には新保村とある。

正保郷帳 「新保村」

加越能三州地理志稿 「新保村」(太田保72村の内)

越登賀三州志 「新保村」(太田庄36村の内)

また布市に「古新保」の小字が残っており、新保の地名に由来するものと考えられる。

II 調査の経緯

1 調査に至るまで

上新保遺跡は、昭和63~平成3年に行われた富山市域内の分布調査によって発見され、No.497上新保遺跡として平成5年3月発行『富山市遺跡地図(改訂版)』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られるところになった。

分布調査の際の現地確認では、土師質土器、珠洲焼、越前系陶器や近世陶磁器が地表面に分布しており、中世から近世にかけて営まれた遺跡であるとの見通しを立てていた。しかし今回の試掘調査の結果、後述するようにその下から古代の集落遺跡が発見され、遺跡の新たな性格づけを考える必要が生じた。

遺跡西側の上堀地区は市街化区域に含まれ、都市計画道路が設置されるなどしたため、急速に宅地開発が進み、その影響を受けて上新保地区も市街化区域への編入と土地区画整理の必要性が高まってきた。

平成6年11月、大洋不動産株式会社内に設置された富山市上新保地区区画整理準備委員会から埋蔵文化財の所在確認依頼が提出され、遺跡部分全体を計画区域に含む区画整理事業が予定されていることが判った。

遺跡周辺では既往の調査実績はなく、遺跡の正確な広がり等も確認していなかったため、試掘調査が必要であると判断された。このため、平成7年度において水田刈取終了後試掘調査を行うことで合意し、今回調査となつたものである。

2 試掘調査の経過

調査は、刈取の完了した後、平成7年11月4日から平成8年1月8日まで実施した。

試掘トレンチは、水田形状等を考慮して任意に55か所を設定し、重機で表土排土後、作業員により包含層発掘、遺構確認を行った。トレンチは、幅1.1m、総延長1,145mとなり、発掘総面積は1,260m²である。

III 調査の概要

1 概要

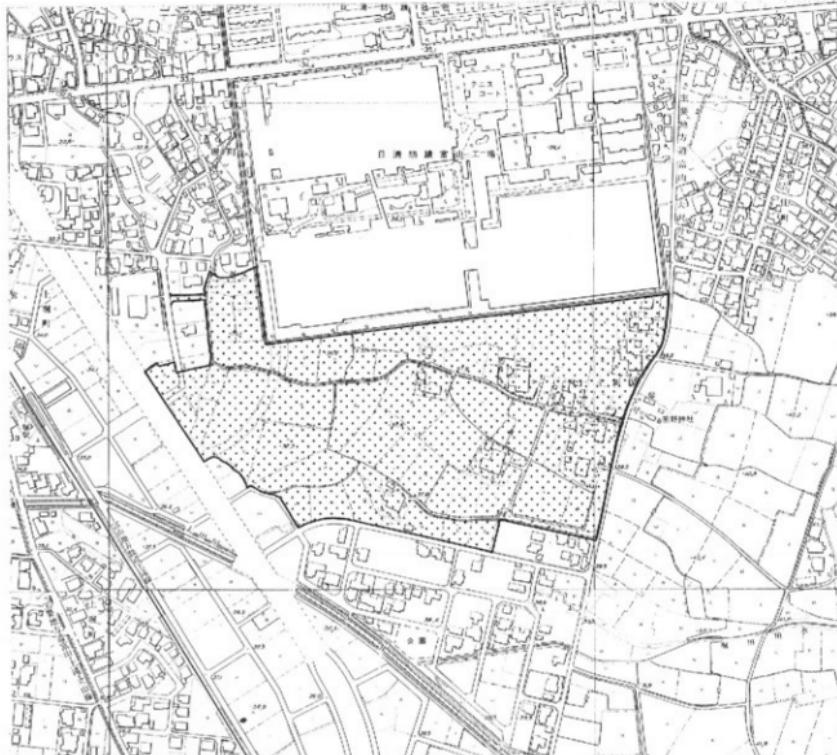
調査では、2地区に遺跡の広がりを認めた。第1地区は西側に形成された中世の集落で、面積は11,400m²、第2地区は東側に形成された古代及び中世の集落で、確認した遺跡面積は32,200m²であるが遺跡は北側及び東側へさらに広がる。

出土遺物には、古代の土器・中世の土器・陶器、中国製磁器（青磁）、近世陶磁器、砥石、鉄滓・羽口・鍛冶炉壁などがある。出土品の総量はコンテナ約20箱分である。

2 第1地区の概要

(1) 基本層序

第1層水田耕作土（厚さ60～90cm）、第2層黒灰色土（中世遺物包含層、厚さ10～20cm）、第3層黒色土（中世遺物包含層、厚さ10～20cm）、第4層黄色シルト質砂土（中世地山）となり、第4層上面が中世遺構の検出面となる。第1層は西縁部で厚い傾向にある。第2層は下部に鉄分を多く含み、中世段階の水田の可能性がある。



第3図 試掘調査区域 (1:5,000)

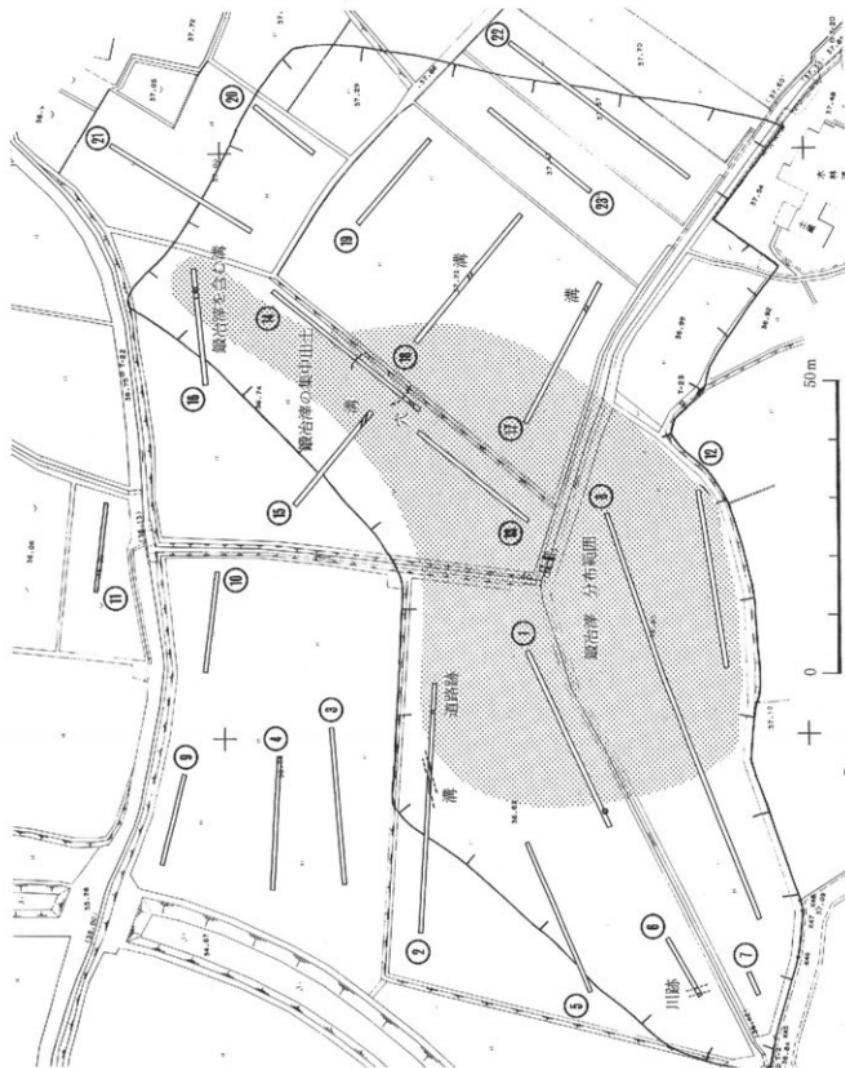


第4図 調査区と確認された遺跡の広がり

4層下は、5層黒色土、6層暗黄色土となる。これらは第2地区と対比した場合、5層が古代遺物包含層、第6層が古代地山となるが、第1地区においては遺構・遺物は確認されていない。

(2)遺構（第5図）

中世の川跡、溝が多い。遺跡の中央部約4,500m²に鉄滓（鍛冶津・楕形津）・炉壁・羽口の分布が認められ



第5図 第1地区の遺構の広がり (1:300)

た。出土した総重量は20.7kgで、1,8,13,14,16トレンチから多く出土した。特に14トレンチの南部では、長さ約20mにわたる溝または落込み内から鉄滓が多く出土し、その南側には建物跡とみられる柱穴群があった。また、16トレンチ東部では、幅約30cmの浅い溝から鉄滓が多く出土した。鉄滓は、数mmから数cmの小型の球状または片状のものが主で、粗砂とともに溝内に充満していた。

これらの状況から、鉄滓分布範囲の北部付近に鍛冶炉及び関連遺構の存在が推測される。

(3) 遺物 (第10,11図、図版8~11)

遺物は、古代の土師器、中世～近世の土器・陶器、中国製磁器（青磁・白磁）、鉄器、砥石、羽口、鉄滓、被熱礫がある。遺物の主なものは、中世の土師質土器67%・珠洲焼18%である。

土師器 回転糸切底をもつ椀（104）・長胴甕（105）がある。平安時代（9世紀代）に属する。

土師質土器（106～122） 非ロクロの製品で、径8～9cmの小形品と12～15cmの中・大型品がある。口縁部は厚く丸みをもち、強い一段ナデを持つもの（106～109,111～113）、先端が尖るもの（110,116～119）、先端が細く外反するもの（121,122）がある。それぞれ13世紀後半、15世紀、16世紀に属する。

青磁 123,125は蓮弁文椀で、龍泉窯系の製品。124は同安窯系の椀でいずれも14世紀から15世紀に属する。

美濃窯戸 126は瓶の肩部で、一条の沈線が巡る。

八尾焼 127は大甕の口縁部で、断面N字状となる。14世紀に属すると思われる。

珠洲焼 壺T種（128）は吉岡編年II2期（13世紀前半）、大甕（136）、片口鉢で端部の面取りがやや丸みを帯びる139,140はIV期（14世紀前半）、端部が外反する片口鉢（147）はV～VI期（15世紀前半）に属する。

砥石 方柱状のもの（150）と板状のもの（151～153）がある。前者は凝灰岩質の石材を使用する中砥石である。後者は凝灰質泥岩の仕上げ砥石で、表裏二面は平滑である。

羽口（図版10下） フイゴの羽口で、先端部がガラス状に融解し、細かい気泡が多く入っている。

鉄滓（図版11） 鍛冶滓と思われ、1,8トレンチでは椀形滓が多く認められる。

3 第2地区の概要

(1) 基本層序

遺跡内においては、古代・中世の層が重複して検出されるところが約4分の3を占めるが、北東部では、古代または中世の単純層唱っている。基本層序は重複部分で確認したものを記載する。

第1層水田耕作土（厚さ40～130cm、中世以後現代のものも含め2～5面の水田形成がある）、第2層黒灰色土（中世遺物包含層、厚さ5～20cm）、第3層黒色土（中世遺物包含層、厚さ5～20cm）、第4層黄色砂質土（中世地山層、厚さ5～20cm）、第5層黒灰色土（古代遺物包含層、厚さ5～15cm）、第6層黒色土（古代遺物包含層、厚さ5～50cm）、第7層黄色砂質土（古代地山層）となる。地点によっては第2層、第5層が欠失するがそれぞれの層の上面で遺構が検出されることが多い（第7図）。

遺跡の北西部では概して古代層の堆積が厚く、29トレンチではその上部に水田床土と推定される褐色土が確認されている。

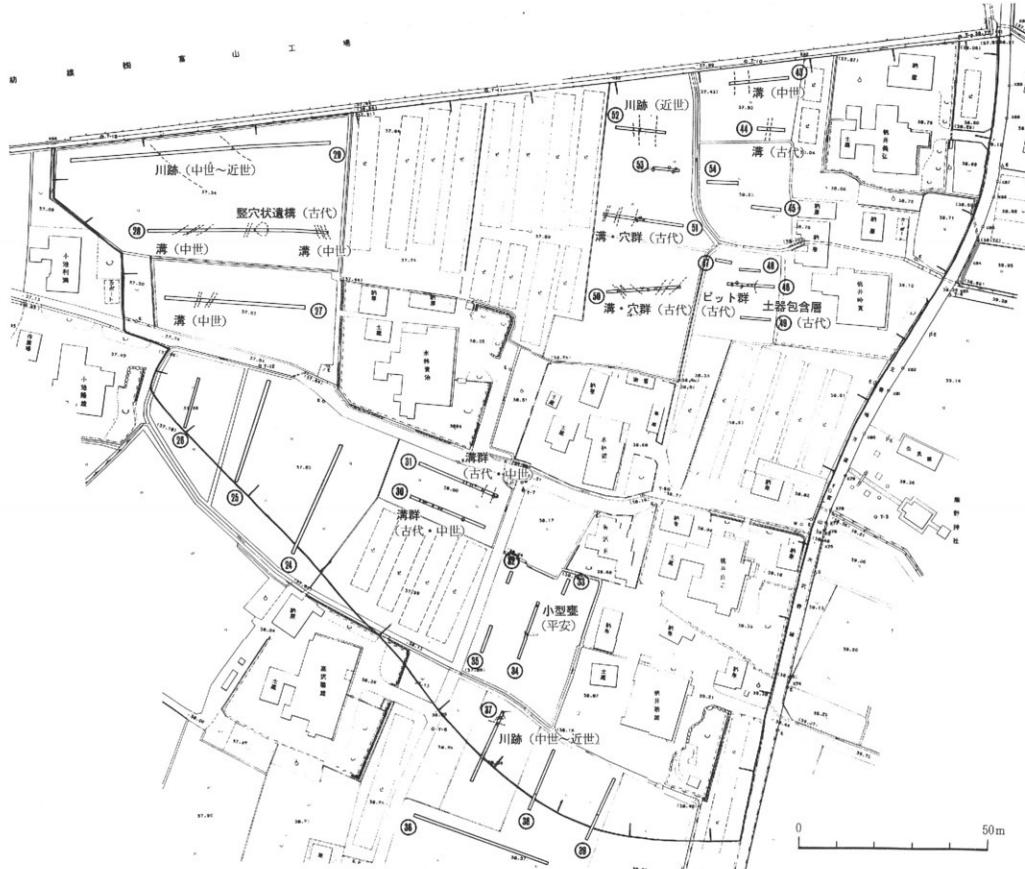
(2) 遺構

中世から近世にかけての遺構には、川跡がある。遺跡北部の29トレンチでは、南東から北西に流れる幅15m、深さ約1mの規模の大きなものが確認された。

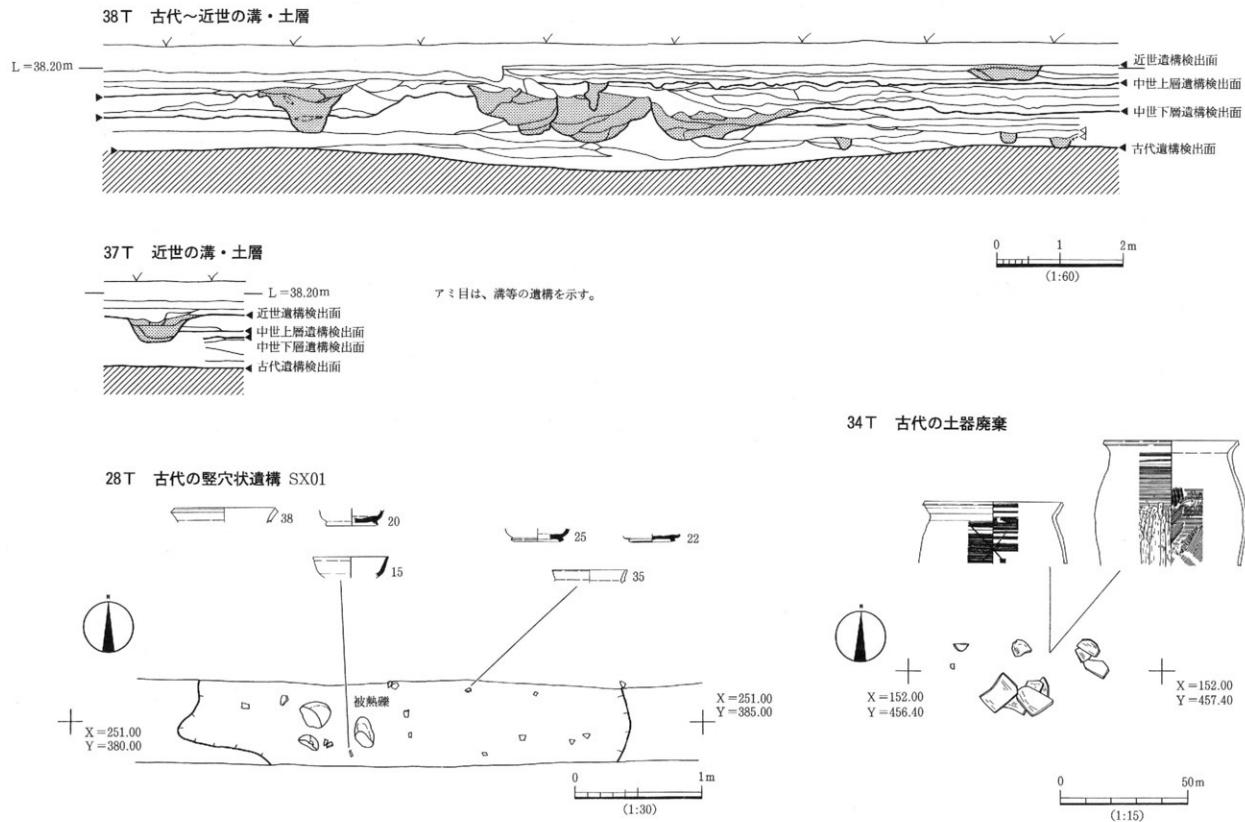
中世の遺構には、土坑、溝があり、溝が多数を占める。溝の規模は幅30～1m程度で、20～60cmの浅い掘込みを持つものが多い。幅1m程度のものは覆土中に砂礫の堆積が見られるものが多く、川跡と考えられる。

古代の遺構には、竪穴状遺構、土坑、ピット、溝があり、溝の数が多い。検出される遺構の密度は比較的高い。

遺跡北部の28トレンチで検出された竪穴状遺構（第7図）は、一辺約3mの方形のものと推定され、焼けた礫



第6図 第2地区の遺構の広がり (1:1,000)



第7図 第2地区の土層・遺構

を伴っていることから、竈を有する堅穴住居または工房と考えられる。

28トレンチの周囲や遺跡北東部の50,51,53トレンチ、遺跡中央部の30,31トレンチで円形または隅丸方形のビットが多く確認されている。これらは掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。

溝は、北北東から南南西方向のものが多く、これと直行する方向のものも一部ある。また、30トレンチでは幅約20~40cmの間隔を開けて連続して並ぶ溝群が検出されており、畠跡と考えられる。

(3) 遺物 (第8~10図、図版12~15)

遺物は、古代の須恵器、土師器、中世~近世の土器・陶器、中国製磁器(青磁)、鉄器、砥石、鐵滓、近世陶磁器がある。遺物の主なものは中世の土師質土器14%、古代の須恵器13%・土師器13%である。

須恵器 (第8図1~30) 杯蓋、杯、横瓶、甕がある。

杯蓋は、端部断面が三角形状のもの(1)、丸く立つもの(2~4)、端部が丸くわずかに下に張り出すもの(5~9)がある。平安時代前期(9世紀から10世紀後半)に属する。

杯は、無高台もの(10~16)は、底部から丸く体部へつながり、口縁が真っすぐ立ち上がるもの、口縁がやや外反気味になるもの、底部から屈曲して体部へつながるもの3種がある。高台のあるもの(17~25)は、口縁がないものばかりである。高台部から丸く体部へつながるものが多く、他に高台外側からすぐに折れて体部へつながるものがあり、17では高台がわずかな三角形状の突起になっている。

横瓶(28)は、外面タキ内面同心円当て具痕がみられる。

これらは平安時代前期(9世紀から10世紀後半)に属するもので、9世紀代のものが主である。

土師器 (第8図31~46,48~81) 梶、小型甕、長胴甕、鍋があり、長胴甕が多くを占める。

梶(31)は丁寧に磨かれ、内外面に赤彩されている。口縁はわずかに外反する。

小型甕(32~35)はくの字状に折れ曲がる口縁をもち、体部にハケ目調整がなされるもの(32~34)が多い。

長胴甕(36~74)は、口縁端部の形態により区分される。a 端部が丸く細まるもの(36,37)、b 面取りがなされるもの(38,39)、c 上端部を細く摘み上げるもの(40~42)、d 端部が短く上に立ち上がるもの(43~55)、e 丸く肥厚した端部外側に1条の沈線を施すもの(57~61)、f 端部が丸くなるもの(62~64)がある。体部は、外面タキ内面扁状當て具痕のもの(68~71,74)、外面タキ内面ハケ目のもの(66,67,72)があり、前者が多い。

鍋(75~80)は、口縁上端部を摘み上げて三角形にするもの(75,78,79)と丸みをもたせるもの(76,77)がある。外面ケズリ内面ハケ目調整となる。

これらは平安時代前期(9世紀から10世紀後半)に属する。

梶(81)は厚い底部の外面に回転糸切り痕を残すもので、11世紀後半から12世紀代のものである。

製塙土器(47) 体部片で、やや厚みがある。57~64の土師器甕に共伴して出土しており、10世紀代に属する。

土師質小皿(82~94) 非クロロ成形による皿で、口縁部は厚く丸みをもち、強い一段ナデを持つもの(82~91)、先端が細くなるもの(92,93)、先端が細く外反するもの(94)がある。それぞれ13世紀後半、15世紀、16世紀に属する。

青磁(95、図版9) 体部外面に雷文を施す龍泉窯系の梶で、14世紀に属する。

珠洲焼(96,97) 壺の口縁部で、97は吉岡編年Ⅲ期(13世紀後半)、96はIV期(14世紀前半)に属する。

越中瀬戸焼(98~100) 98は褐色の光沢のある鉄釉皿、99は褐色鉄釉のさや鉢で、胎土に長石粒を多く含む。17世紀代に属する。100は黒褐色の光沢のある鉄釉摺鉢で、内面の卸し目は12本单位で密に施している。18世紀以降に属する。

伊万里(101,102) 染付碗がある。18世紀以降に属する。

鉄器 刀子(103) 1点がある。

小 結

上新保遺跡は当初中世～近世の単純遺跡と考えていたが、試掘調査の結果、遺跡は2つの地区に広がり、西側の第1地区は中世の集落遺跡、東側の第2地区は古代（平安時代）の集落遺跡と中世の集落遺跡が重複していることが明らかになった。

第1地区の中世集落においては、遺跡のほぼ全面において鍛冶溝が出土し、鍛冶工房を有する集落であったと考えることができる。その存続年代は、出土土器から鎌倉時代（13世紀前半）から安土桃山時代（16世紀）の中世全般にわたるとみられる。

第2地区の中世集落においては、鍛冶溝の出土はほとんどなく、第1地区的状況と異なっている。むしろ溝や川跡が多く、集落の周辺部とみるほうがよいかもしれない。存続年代は第1地区とはほぼ同じである。

第2地区では、中世集落の下に、厚さ約20cmの黄色砂質土を介して古代の集落遺跡が所在する。この間層はほぼ全面にみられ、河川起源の堆積物と考えられる。分布調査で古代の遺物が確認されなかったのはこの間層によって良好にバックされていたためである。

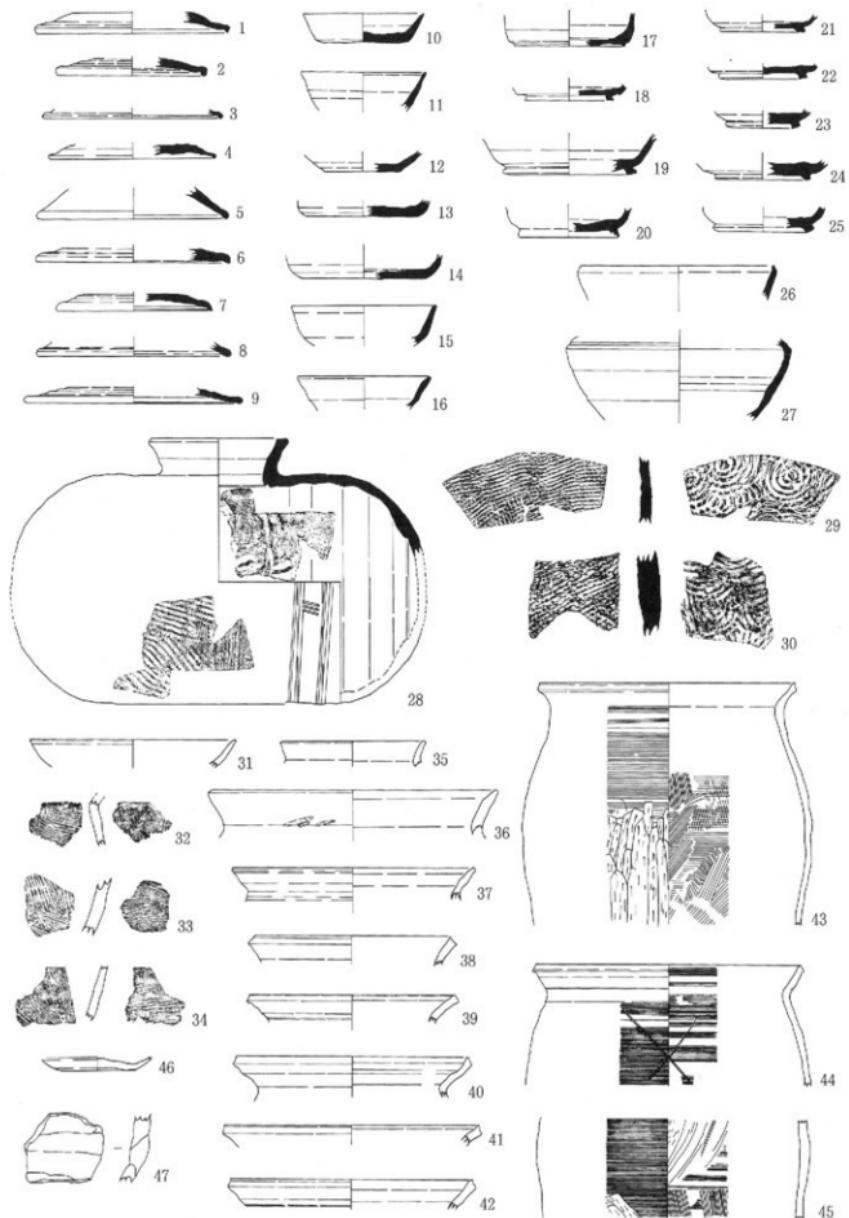
古代の遺構には、住居もしくは工房と考えられる堅穴遺構、畑跡、土坑、河川跡などがあり、また一部水田と考えられる断面が観察できることから、一般的な農村集落と考えることができる。ただし遺跡の規模はかなり大きく、確認できていない東側の調査等によって新たな知見が得られる可能性は大きい。

古代の集落は、平安時代初期（9世紀始め頃）から営まれ始め、平安中期（10世紀後半頃）まで継続したと思われる。これらは神通川扇状地にみられる開発型農村集落の典型的な姿と考えることができる。

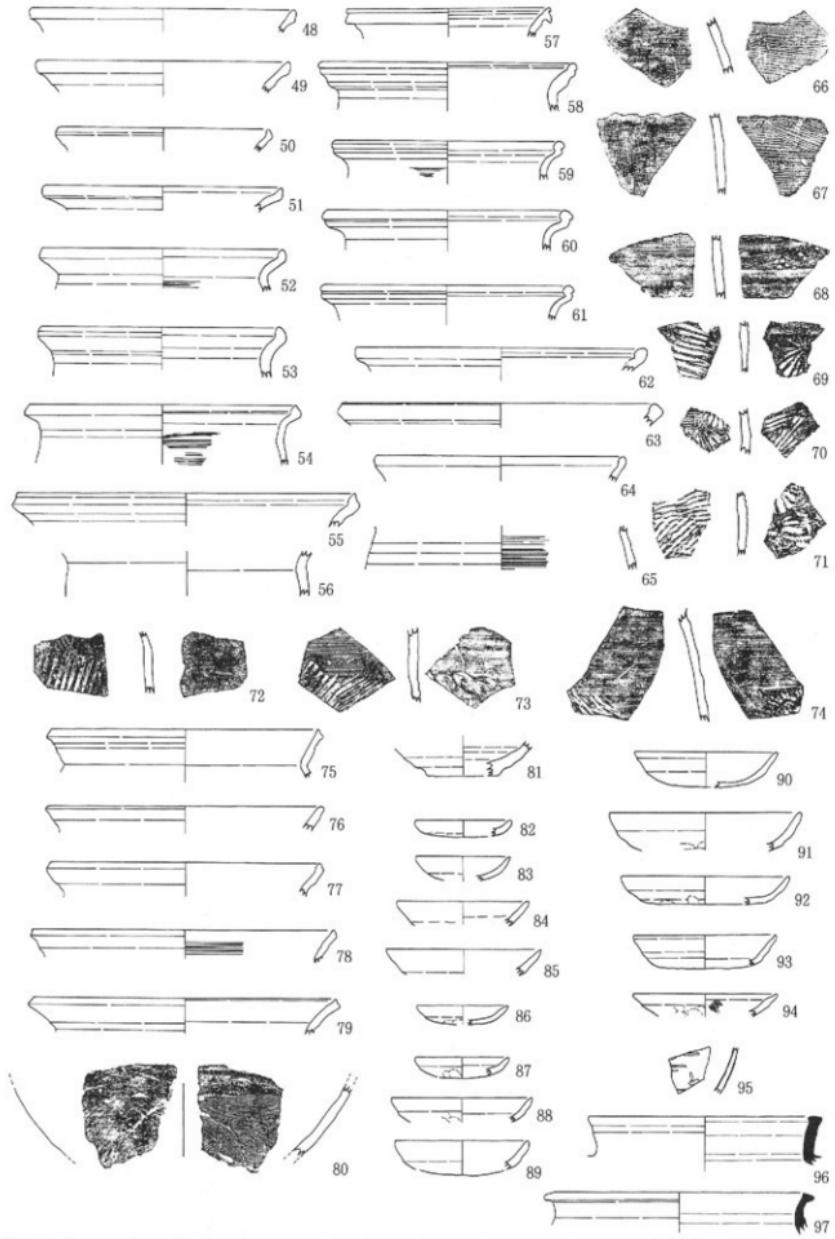
遺跡ではその後、平安後期（11世紀後半から12世紀頃）にも集落が営まれているが、出土遺物はわずかで集落も小規模であったと推定される。

参考文献

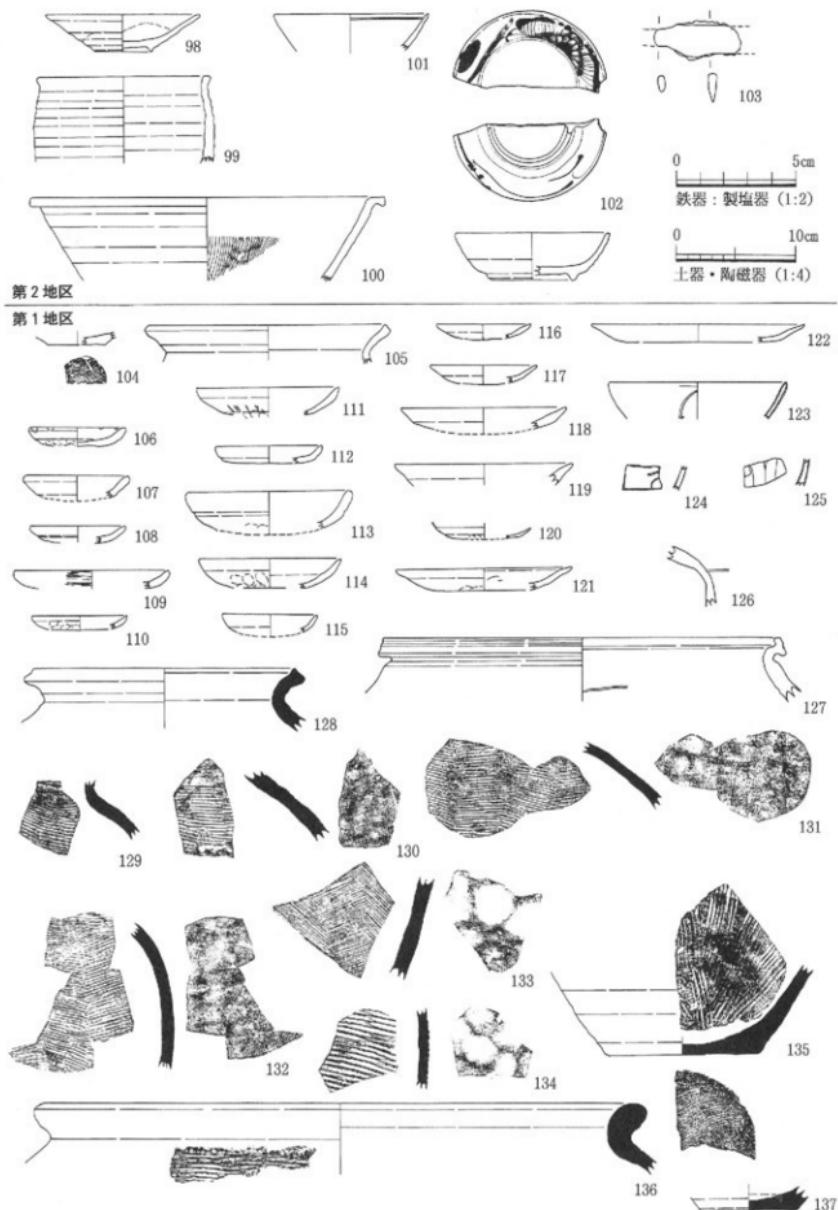
- 太田郷土史編纂委員会編 1987 『太田郷土史』 太田自治振興会
熊野郷土史編纂委員会編 1989 『熊野郷土史』 熊野校下自治振興会
高岡 徹 1993 「戦国期上杉支城の復原研究－越中今泉城をめぐる戦国史－」『富山市日本海研究所紀要』
第6号 富山市日本海文化研究所
高瀬重雄監修 1994 「富山県の地名」日本歴史地名大系16 平凡社
月岡郷土史編纂委員会編 1991 『熊野郷土史』 富山市月岡校下自治振興会
富山県教育委員会 1979 『富山県歴史の道調査報告書－飛騨街道（その1）－』
富山大百科事典編集事務局編 1994 『富山大百科事典』 北日本新聞社
中村太一路 1963 『富南の歴史』 富南の歴史刊行会
鯨川校下史編纂委員会 1968 『鯨川の郷土史』 鯨川校下自治振興会
北陸中世土器研究会 1990 『中世北陸の在地窯－生産と流通の諸問題－』
北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
吉岡康暢 1989 『人類史叢書10 日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』 六興出版
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



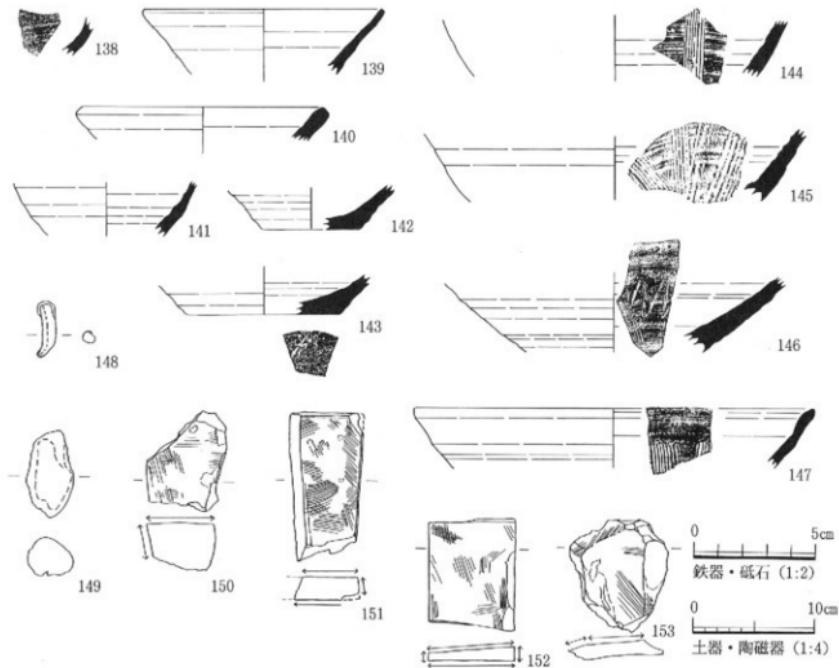
第8図 第2地区出土遺物 須器 (31~46)、製塩土器 (47) 1:4 (47のみ1:2)



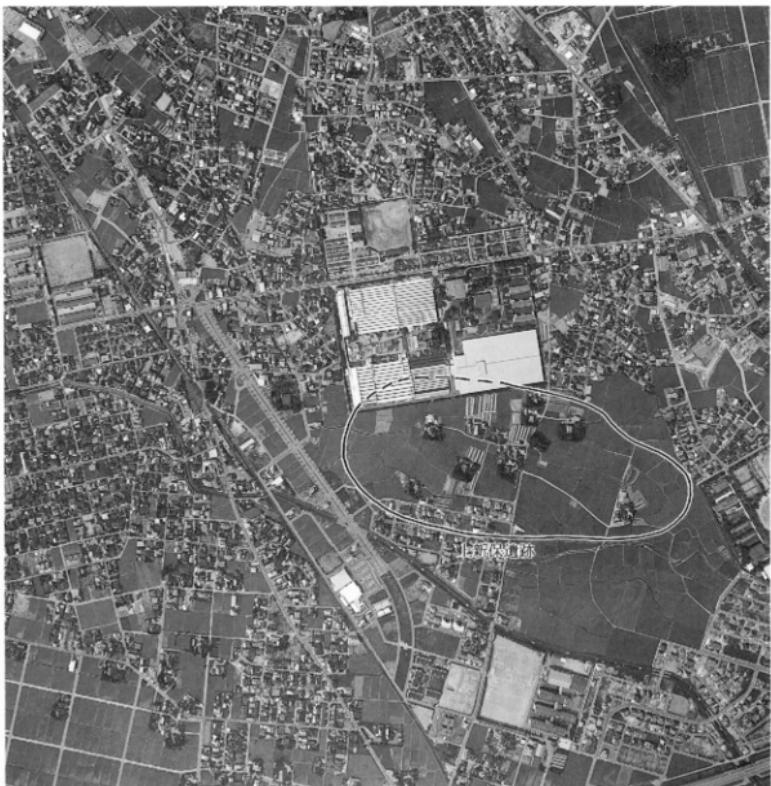
第9図 第2地区出土遺物 土師器(48~81)、土師質小皿(82~94)、青磁(95)、珠洲焼(96、97) (1:4)



第10図 出土遺物 越中瀬戸焼 (98~100)、伊万里 (101、102)、刀子 (103)、土師器 (104、105)、
土師質小皿 (106~122)、青磁 (123~125)、美濃瀬戸 (126)、八尾焼 (127)、珠洲焼 (128~137) (1:4)



第11図 第1地区出土遺物 珠洲焼 (138~147)、釘 (148)、不明鉄製品 (149)、砥石 (150~153)



上新保遺跡周辺の航空写真（1995年富山市撮影）



調査風景（第2地区北西部）

図版2 (第1地区)



14トレンチ確認状況（南から）



14トレンチ鉄滓集中地点（南から）



1トレンチ中世遺構検出状況（西から）



16トレンチSD01（鉄滓溜り）



1トレンチ土層

図版 3 (第2地区)



28 トレンチ中世溝群（東から）



28 トレンチ中世溝群・古代包含層（右側）



28 トレンチ中世溝（SD03）（南から）



29 トレンチSX01上器出土状況



29 トレンチSX01（部分）被焼土と土器

図版4 (第2地区)



29 トレンチ古代遺構検出状況（東から）



30 トレンチ古代遺構検出状況（西から）

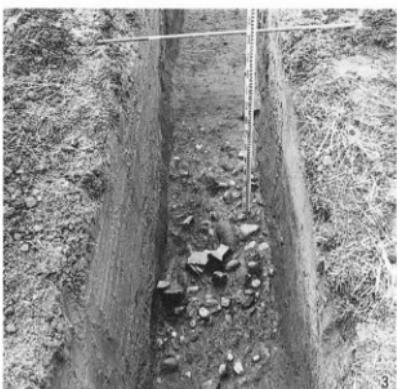


31 トレンチ中世遺構検出状況（東から）



31 トレンチ西半古代遺構（手前）（西から）

図版5 (第2地区)

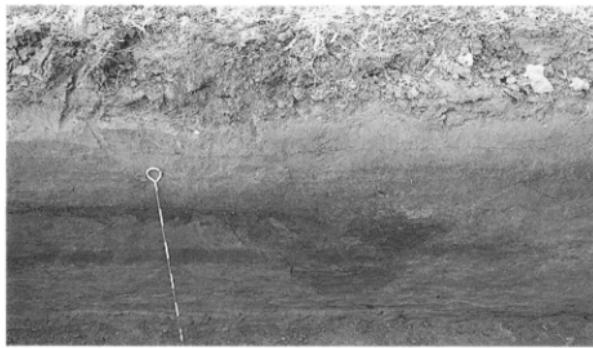


- 1 34トレンチ（北から）手前の礫上に土器集中
 2 34トレンチ上器集中部分
 3 34トレンチ深度
 4 37トレンチ北半古代遺構検出状況（北から）
 5 37トレンチ中世包含層（黒色土）上から切り込まれた溝跡断面

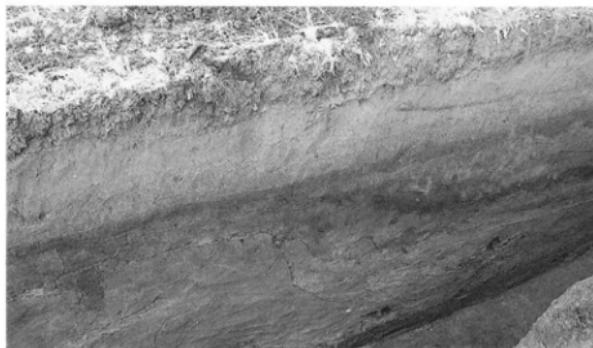
図版 6 (第2地区)



▲
38 トレンチ土層（南東から）



38 トレンチ中世上面から切り
込まれた溝跡断面



38 トレンチ土層（部分）

—中世上面包含層

—河川堆積物

—中世下面包含層

—古代包含層

図版7 (第2地区)



50トレンチ土層



50トレンチ古代遺構検出状況(西から)

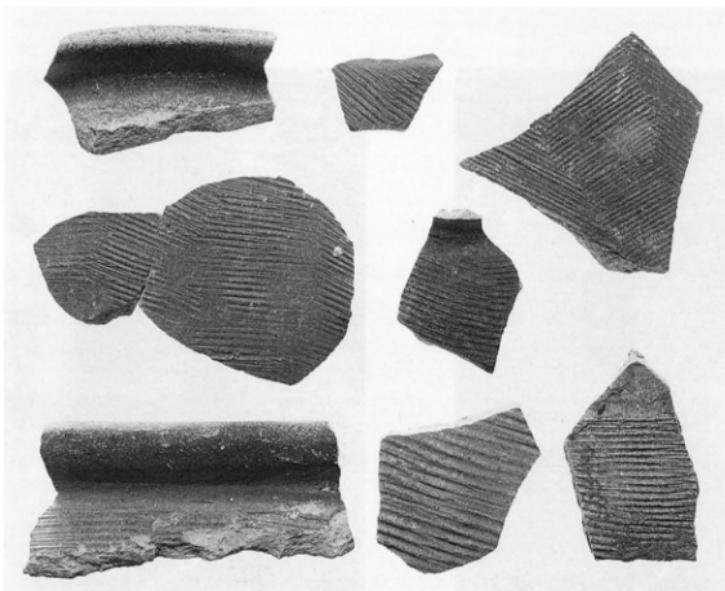
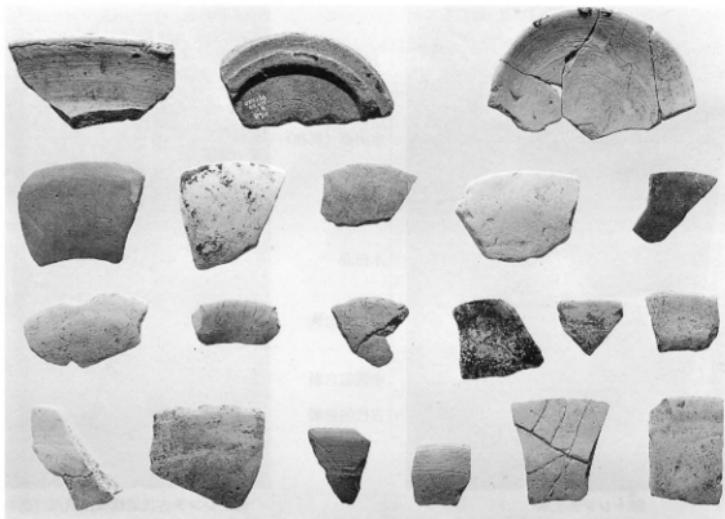


51トレンチ古代遺構検出状況(西から)



51トレンチ古代遺構検出土器出土状況

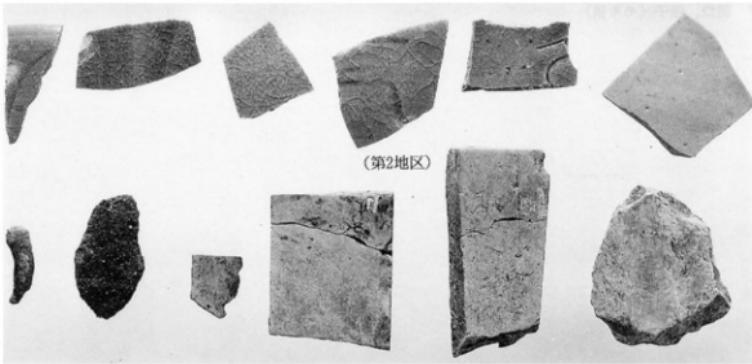
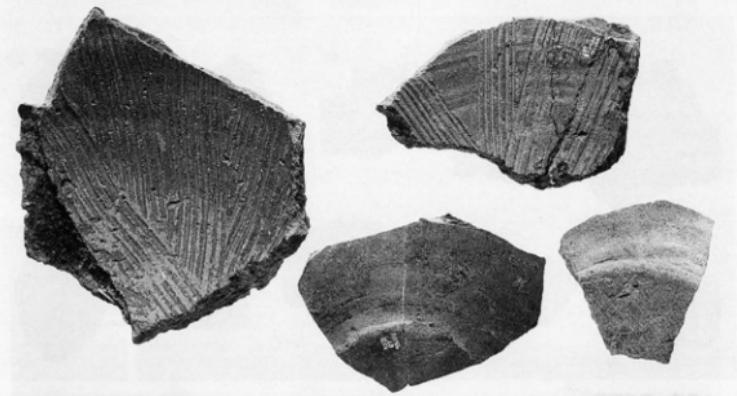
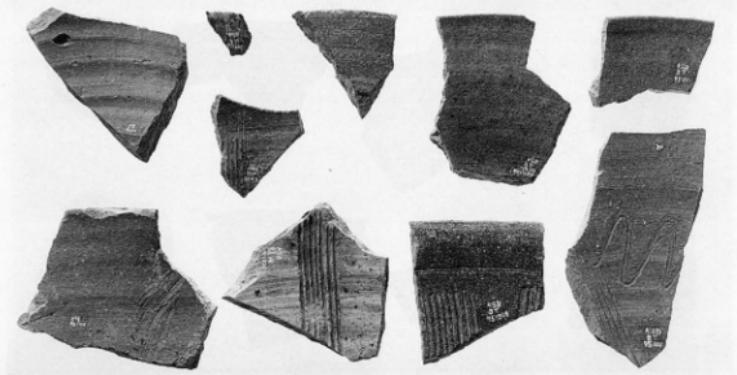
図版 8 (第1地区遺物)



上 古代～中世の土器（土師器・須恵器・土師質土器）

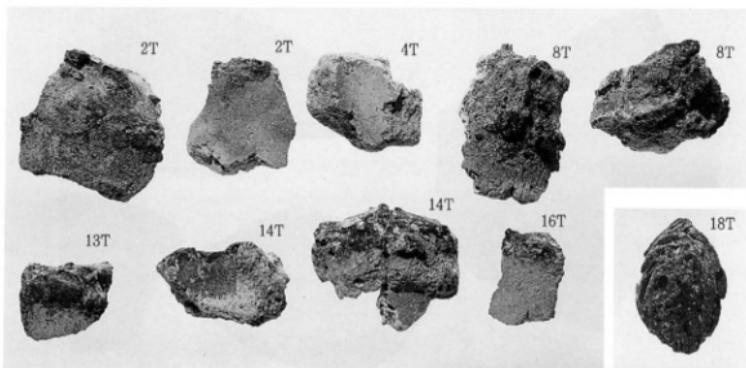
下 中世の陶器（珠洲焼）

図版9 (第1地区遺物)



上・中 珠洲焼
下 青磁・鐵器・砥石

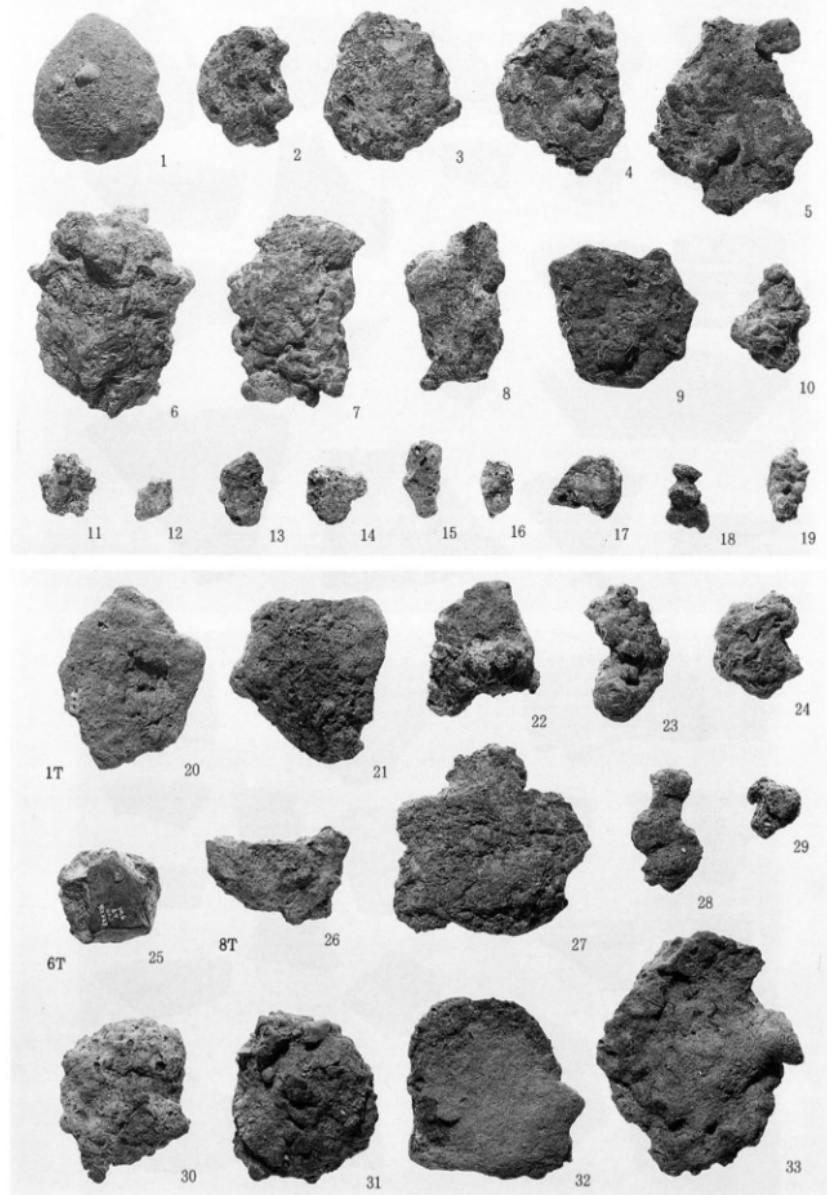
図版 10
(第1地区遺物)



上 八尾焼、美濃瀬戸

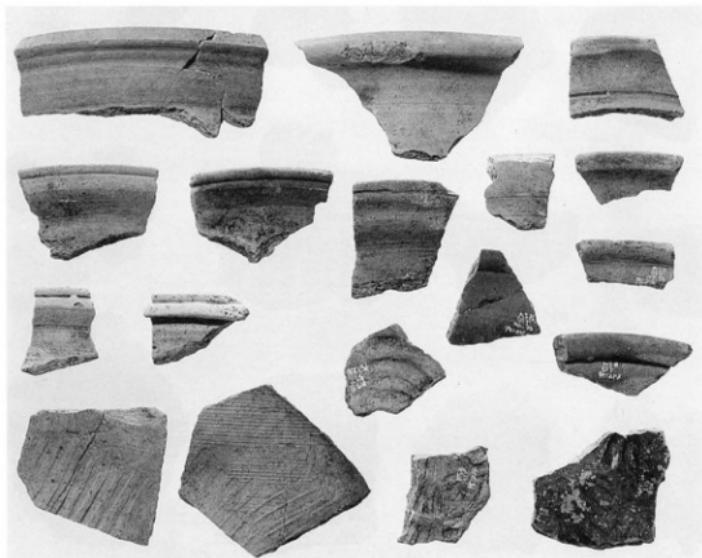
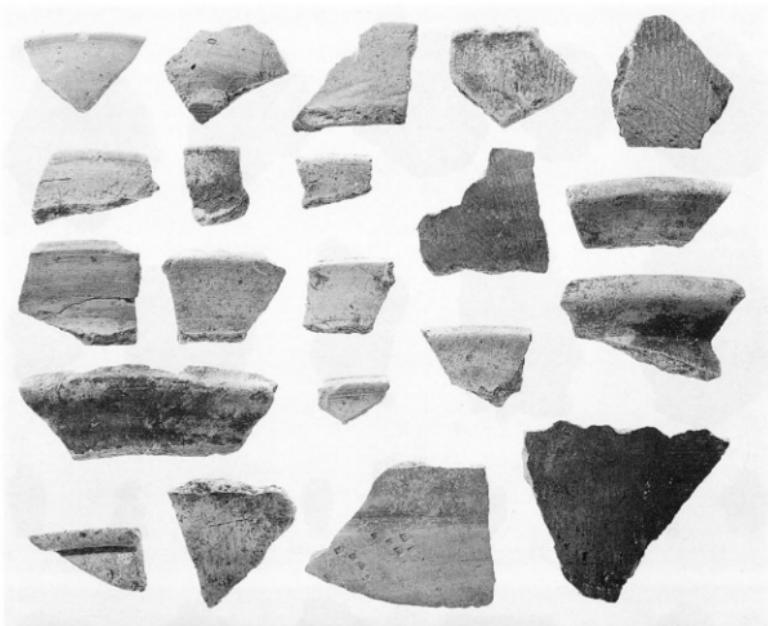
下 羽口、種子（モモ核）

図版 11 (第1地区遺物)



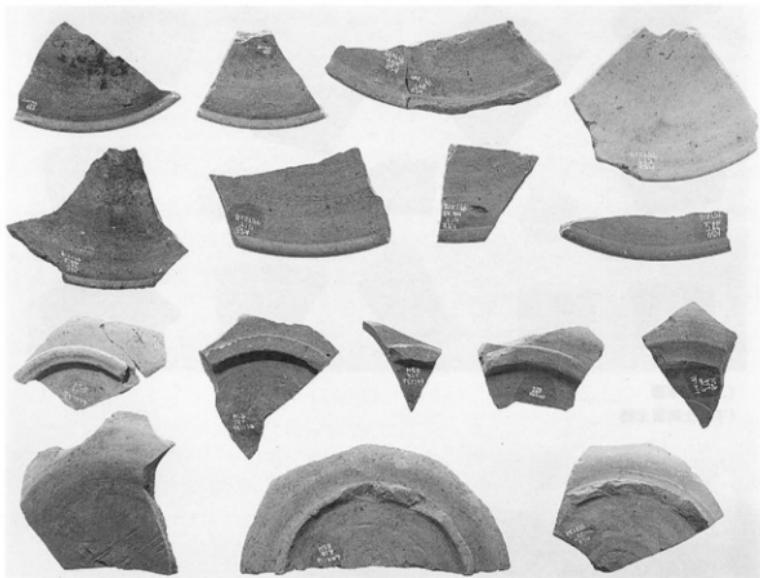
鉄滓 (1~7: 14T、8~19: 16T溝、20~24: 1T、25: 6T、26~33: 8T)

図版12 (第2地区遺物)



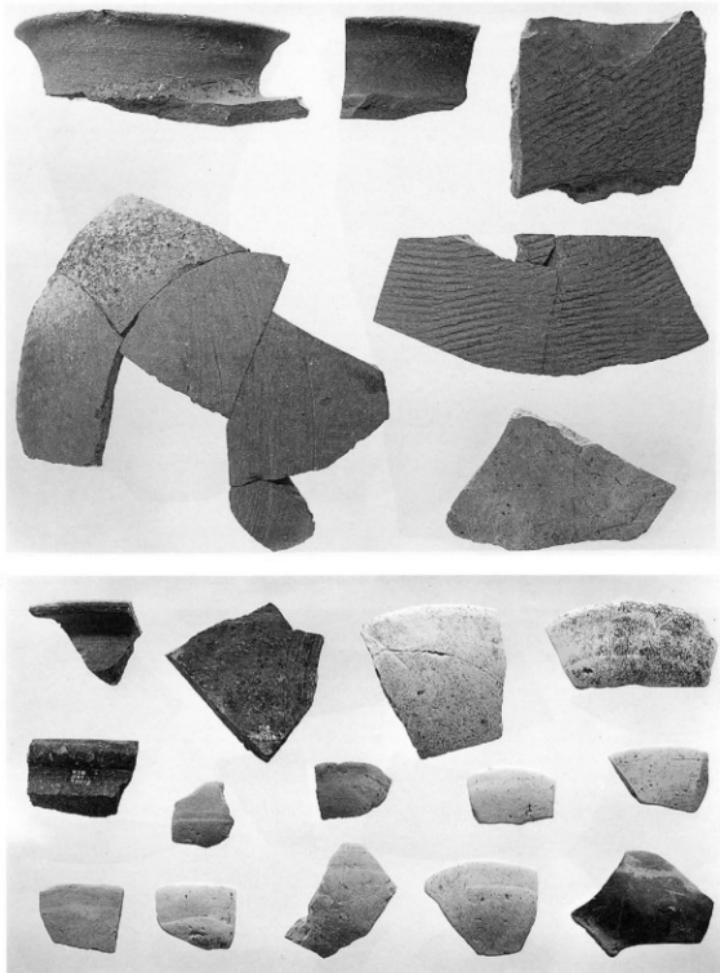
土師器

図版13（第2地区遺物）



(上) 土師器、(下) 須恵器

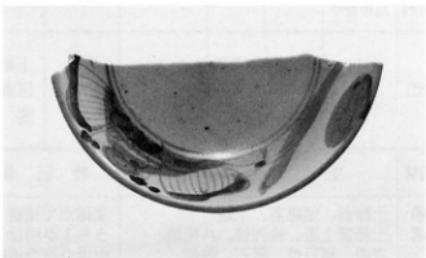
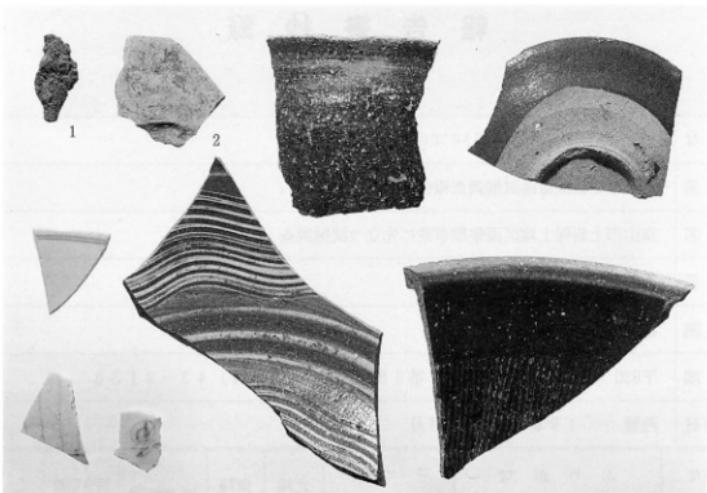
図版 14 (第2地区遺物)



(上) 須恵器

(下) 土師質土器

図版 15 (第2地区遺物)



上 刀子 (1)、砥石 (2)、近世陶磁器

下 近世陶磁器

報告書抄録

ふりがな	とやましかみしんぼいききしくつちょうさほうごく							
書名	富山市上新保遺跡試掘調査報告							
副書名	富山市上新保土地区画整理事業に先立つ試掘調査							
編著者名	古川知明							
編集機関	富山市教育委員会							
所在地	〒930 富山県富山市新桜町7番38号 電(0764)43-2138							
発行年月日	西暦 1996年 3月 30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみしんぼ 上新保遺跡	富山県富山市上新保	16201	497	36度 39分 00秒	137度 14分 50秒	1995.11.04 ~1996.01.08	1,260	上新保土地 区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上新保遺跡	集落跡	奈良～平安 中世(室町) 近世	穴、溝 穴、溝	土師器、須恵器、上鍤 土師質上器、珠洲焼、八尾焼、 青磁、瀬戸焼、砥石、鉄滓 越中瀬戸焼、唐津、伊万里				
							2地点で遺跡を確認。 うち1か所は古代・ 中世の複合遺跡。	

富山上新保遺跡試掘調査報告

編集・発行 富山市教育委員会

富山市新桜町7番38号

☎0764-43-2138

発行日 平成8年3月29日

